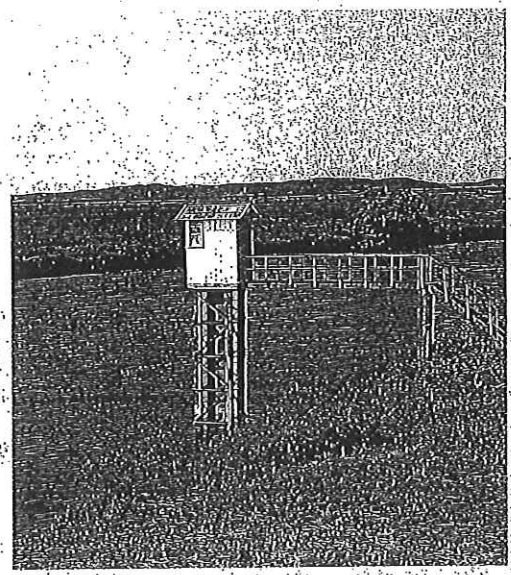




大楽毛物語

10



大楽毛川に合流の阿寒川

“大正九年八月十日夜、突如大洪水が起った。阿寒川も釧路川も記録は勿論伝説にもない大氾濫に襲われた”と、鳥取

町誌」は伝え、「豪雨続きの夜空暗澹として陰惨の気漲る。一昨八日午後十時半ごろ、警鐘突如として全区に響き渡るや、警舞橋畔一帯渺漫たる水

に浸りて...”と「新釧路市史」は十二日付釧路新聞の号外記事を紹介している。

この年八月初めから東北、北海道に降り続いた雨で、旧釧路川も阿寒川も、水かさを増した濁流のために、各所で河身が破られた。旧釧路川の鉄橋付近の増水は実に八尺にも及び、警鐘乱打の暗黒の街を西警舞付近の人

々は、懸命に警舞橋を渡つて山の平に逃げた。しかし、鳥取では切換水路に架けた橋が流失した程度でさほどの異変も見られず、いつもは旧釧路川の水が引いてもなお滞留していた阿寒川の水がさあつと減水してしまつたのだ。あとで分かつたのは、古辛峽谷の枝川の水を集めて奔流していた阿寒川は、穂祿平から突然方向を変え、堤防を破つて大楽毛川に合して海に出ってしまったのだ。この

転流した水路こそ、移住間もない村民たちが救済工事で掘った第一分水路で、これが鳥取を悲惨な状況一歩前で救つた。

旧釧路川を埋め尽す土砂

一方旧釧路川の方は一週間も減水せず、流出した土砂が港内を埋め立ててしまった。驚いた築港事務所では直ちにこの状況を道庁に報告した。時の長官は笠井信一。釧路

港修築計画の改訂を決意し、根本的に釧路川の改修を行うことにした。

この治水工事は大正十年から昭和十一年まで十五年間にわたる継続事業で、釧路川を岩保木から分流し、延長十二キロ、幅員二百メートルを掘削、旧阿寒川を切断、海に放流し、延長十二キロの新釧路川掘削

ようというもので、大正十年六月に着工、完成して通水式を行ったのは昭和六年九月十九日であった。この工事が始まると治水付近一帯はにわかには活況を呈するようになった。いまの鳥取橋南ともと付近は、見る間に人家が建てられ、商店が店開きし、たちまち百戸の新市街が出来た。大きな飯場が二棟出来て、毎日百人、二百人という労働者が入り込み、ついには赤前重の女さえ顔を見せるようになった。

それよりも何よりも、

湿地帯が乾いた牧場へと新しい川が掘り進められると共に、その兩岸は乾燥し、じくじくの谷地が牧場に変わっていった。

考えてみれば、大正九年の大出水は、移住以来の村民たちの、水との戦いと同時に、その終わりを告げるものであった。

この洪水のために阿寒川は大楽毛川へと転流してその下流が洪水から免れるようになったし、大治水工事によって干拓が促進された。禍が福を生んで、水害の悲劇は消えたのである。入夫四百人、一つの現場に平均七十人の三現場、入力の入夫百人、工場の職工百人の大海戦術。土が凍った冬場の作業は、土を掘るのに一坪二十人掛かりだったという。今でこそ大楽毛から車で簡単に通過できる鳥取橋の歴史を知つて無駄ではない。(つづく)

北海道新聞

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨム・ヨ・ドー・シン

0120-464-104

または右記販売所へ